

釧路湿原におけるカイツブリの年3回の繁殖記録

石下 亜衣紗*

Breeding records of Little Grebe for three times a year in Kushiro Shitsugen

Aisa ISHIOROSHI*

はじめに

カイツブリはヨーロッパからアフリカ、アジア温帯部に広く分布するカイツブリ目カイツブリ科に属する水鳥である。北海道、本州北部では夏鳥、本州以南では主に留鳥として全国の湖沼、池、堤などで繁殖している。俳句にも詠まれる身近な鳥であるが、繁殖に関する記録は少ない。年に複数回繁殖し、2回が多いが、北方の生息地では1回のみが多いとされる。(佐原 2005)

本稿では2023年3月～11月、および2024年4月～11月に釧路湿原において本種の年3回の繁殖行動を観察したので、その結果を以下に報告する。

観察地および確認方法

観察地は北海道東部に位置する、釧路湿原国立公園園内にある環境省釧路湿原野生生物保護センター(43°03′58″N, 144°17′50″E)の北側に隣接する人工池である(図1, 2)。池内にはネムロコウホネ、エゾノミズタデ、スイレン、ヒシなどが生えている。カイツブリの餌資源としてトゲウオsp、コイ科の幼魚、淡水エビ、ウチダザリガニが、外敵としては池内にはコイ、アメリカミンクが生息し、オジロワシも飛来する。池の水が枯れることはないが、12月中旬から3月下旬にかけては結氷し、カイツブリをはじめ水鳥は利用できなくなる。人工池自体は南北約310m、東西約150mであるが観察地点から見える範囲は南側半分の面積0.8haほどである。

観察にはセンター2階の窓より双眼鏡(8～10倍)・望遠鏡(20～60倍)を用いての目視、デジタルカメラでの撮影により、カイツブリが飛来してから最後に姿を確認した期間となる2023年3月から11月、2024年3月から11月にかけて行い、親鳥の造巢行動、産卵日、産卵個数、孵化数、巣立ち羽数を記録した。ヒナは早成性(中村ほか1995)のため、渡辺の記録に習い40日齢以上経過したものを巣立ちとして扱った。

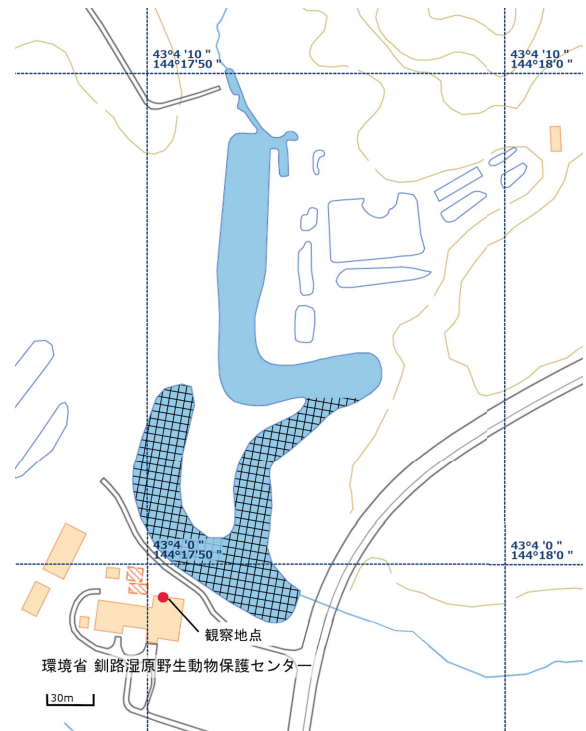


図1. 観察地の人工池。南側のメッシュ部分が観察範囲。



図2. 観察地点からの人工池の様子。

* 釧路湿原自然保護官事務所 Kushiro shitsugen Ranger Office

観察結果

2023年5月～9月にかけて、5回の産卵を行い、うち3回合計9羽の孵化、4羽（1回目1羽、2回目3羽）の巣立ちを。2024年5月～10月にかけて、5回の産卵を行い、うち3回6羽の孵化、3羽（1回目1羽、2回目1羽、3回目1羽）の巣立ちを確認した。よって、2024年は3回の繁殖を成功させた。主な繁殖の記録を表1、2に記す。（図4～7）。なお、カイツブリは産卵までに不完全な仮巣を作る習性がある（渡辺1993）ことから、産卵を確認した巣を順にA～E（図3）とし、ヒナは「誕生月-孵化羽数-巣立ち羽数」（表1、2）として記した。



図3. おおよその巣の位置。

表1. 2023 年カイツブリの繁殖観察記録

日にち (2023年)	成鳥の行動	巣A ヒナ5-0	巣B ヒナ6-1-1	巣C ヒナ7-3-3	巣D ヒナ8-0	巣E ヒナ9-5-不明
3月22日	成鳥1羽 (初認)					
3月31日	成鳥2羽					
4月21日	成鳥3羽					
5月2日	造巣行動					
5月5日	巣A完成	卵あり				
5月8・9日		抱卵中 卵3つ				
5月11日	新たな造巣行動	抱卵中止				
5月15日	巣B完成		卵1つ			
5月19日			抱卵中			
6月15日			1羽孵化			
6月16日	給餌と抱卵		ヒナ1羽			
6月19日	巣C完成 巣B使用せず		ヒナ1羽 (4日齢) 以降巣Cを使用	卵1個		
7月4日				卵3個 抱卵中		
7月12日	殻捨て行動 6-1へ給餌と追い払い		ヒナ1羽	ヒナ1羽 孵化。 卵4個		
7月13日	抱卵中 6-1へ追い払い		ヒナ1羽	さらに2羽孵化。合計 ヒナ3羽		

釧路湿原におけるカイツブリの年 3 回の繁殖記録

日にち (2023年)	成鳥の行動	巣A ヒナ5-0	巣B ヒナ6-1-1	巣C ヒナ7-3-3	巣D ヒナ8-0	巣E ヒナ9-5-不明
7月25日	巣Cは使用せず。 新たな造巣行動		幼鳥 1 羽 (40日齢)	ヒナ 3 羽 仮巣で休憩		
7月27日	造巣行動		幼鳥 1 羽 (47日齢) 以降観察無し	ヒナ 3 羽		
8月 2 ・ 3日						
8月4日	巣D完成。 給餌・抱卵中			ヒナ3羽 (22・23日齢)	卵 1 個 抱卵中	
8月17日	成鳥 2 羽				抱卵中止	
8月22日	巣E使用			幼鳥 3 羽 (41日齢) 以降観察なし		卵 2 個
9月7日	成鳥 2 羽					抱卵中
9月12日						ヒナ 2 羽孵化 抱卵中
9月13日						ヒナ 3 羽 卵 2 つ
9月20・26日	成鳥2羽					ヒナ5羽
10月4日						
10月10日	成鳥2羽					ヒナ 5 羽 (28日齢)
10月31日	冬羽1羽確認					
11月20日	以降観察なし					



図4. 2023年6月19日 巣Cにて産卵。
ヒナ6-1-1(4日齢)も巣Cで育雛。



図5. 2023年10月10日 ヒナ9-5-不明の5羽。

表 2. 2024 年カイツブリの繁殖観察記録

日にち (2024年)	成鳥の行動	巣A ヒナ6-1-1 ヒナ7-2-1	巣B ヒナ7-0	巣C ヒナ8-0	巣D ヒナ8-1-0	巣E ヒナ10-2-1
4月1日	成鳥 1 羽 初認					
4月15日	成鳥 2 羽					
5月1・2 日	成鳥2羽 造巣行動					
5月5日	巣A 完成	卵 1 個確認				
5月7・11・13・17・ 21・24日		抱卵中				
6月3日		ヒナ 1 羽孵化 (6-1) 抱卵中				
6月5・6・8・11・ 19・24・26・日 7月2・4・9日	成鳥 2 羽 7月9日以降6-1へ追い払い 行動も見られた	ヒナ 1 羽 (6-1) 抱卵中				
7月10日	成鳥 2 羽	ヒナ 1 羽 (6-1) ヒナ 2 羽孵化 (7-2) 他に卵 3 個確認				
7月11日	成鳥 2 羽	ヒナ (7-2) が1羽 のみに 抱卵中				
7 月13・17・18日	成鳥 2 羽	幼鳥 1 羽 (6-1-1) 7月13日で40日齢 ヒナ 1 羽 (7-2) 抱卵中				
7月19日	成鳥 2 羽 新たな造巣 行動	幼鳥 1 羽 (6-1-1) ヒナ 1 羽 (7-2) 仮巣で休憩				
7 月20・22・日	成鳥 2 羽 造巣行動	ヒナ 1 羽 (7-2)				
7月24日	巣 B 完成	ヒナ 1 羽 (7-2) 14日齢	卵 1 個 確認			
7月25日	成鳥 2 羽	幼鳥 1 羽 (6-1-1) 52日齢 以降観察無し ヒナ 1 羽 (7-2)	卵 1 個 抱卵中			

釧路湿原におけるカイツブリの年3回の繁殖記録

日にち (2024年)	成鳥の行動	巣A ヒナ6-1-1 ヒナ7-2-1	巣B ヒナ7-0	巣C ヒナ8-0	巣D ヒナ8-1-0	巣E ヒナ10-2-1
7月26日	巣B放棄 新たな造巣行動		抱卵 中止			
7月31日	成鳥2羽 巣Cで抱卵			卵3個 抱卵中		
8月7日				抱卵 中止		
8月8日	成鳥2羽 新たな造巣行動で巣D完成	ヒナ1羽 (7-2)			卵1個確認	
8月19日	成鳥2羽	幼鳥1羽 (7-2-1) 40日齢			抱卵中	
8月30日					ヒナ1羽 孵化(8-1)	
9月1日					ヒナ姿無し (8-1-0)	
9月9日	成鳥1羽 新しく巣E 使用					卵1個 抱卵中
9月27日	成鳥2羽 7-2-1を激しく追い払う	幼鳥1羽 (7-2-1) 79日齢 以降観察なし				卵3個 抱卵中
10月2日	成鳥2羽					ヒナ1羽孵化
10月10日	成鳥2羽					ヒナ2羽 (10-2) 確認
10月17日	成鳥2羽					ヒナ1羽に
10月21日	成鳥2羽 給餌					ヒナ1羽 (10-2)
10月22日	成鳥1羽 不明カイツブリ2羽					ヒナ1羽 (10-2)
11月7日	成鳥1羽					ヒナ1羽 (10-2) 親鳥と行動
11月11日						幼鳥1羽 (10-2-1) 40日齢 以降確認なし



図 6. 2024 年 10 月 10 日 ヒナ 10-2 の 2 羽をおんぶする親鳥。



図 7. 2024 年 11 月 11 日 幼鳥 10-2-1 (40 日齢)。

考察

今回の観察ではカイツブリの個体識別は行えていない。抱卵中につがいとは別の成鳥の姿も見られたこともあったが、観察範囲が0.8haと非常に狭く、他のつがいが見られなかったこと、縄張り意識は非常に強いこと(中村ほか1995)、表1・2のとおり繁殖行動が連続する中で、育雛しているヒナの数が一致しているため、途中で他のつがいに入れ替わっている可能性はほとんどないとみられる。

2023年は暖かく、カイツブリの飛来も早かったが、1回目の産卵が5月5日と2024年と同じ日となった。

連続繁殖の間隔は2023年では1回目のヒナ(6-1-1)が4日齢で2回目の産卵を行い、2回目のヒナ(7-3-3)が22日～23日齢で3回目の産卵となった。2024年では2回目の産卵日が確認できなかったが、孵化日から逆算すると、1回目のヒナ(6-1-1)が12～16日齢ほどで産卵を行い、2回目のヒナ(7-2-1)が14日齢で3回目の産卵となった。渡辺の観察例では1回目繁殖のヒナが22～23日齢ころになると2回目繁殖の産卵をすることが多く、1回目繁殖のヒナが1羽だけで、このヒナが14日齢で2回目繁殖の産卵に入ったことが報告されている(渡辺1993)。そのため、2023年のヒナ1羽(6-1-1)が4日齢で2回目(7-3-3)の産卵に入ったのは、非常に早い記録となった。2024年においても12日～16日齢ほどで次の産卵を行っており、孵化が1羽、もしくは育雛初期段階でヒナが1羽になってしまった場合には、育雛にかかるエネルギーが少なくて済み、次の繁殖に早く入ることができると考えられる。

福田(1986)によるとカイツブリは気候が比較的穏やかで、安全で、造巣場所があり、食物が豊富であることなどの好条件が揃えば、秋冬期にも繁殖することが示唆されており、夏鳥として飛来する北海道東部において

もこの条件が揃っていて、かつ5月上旬に1回目の産卵を行えていれば、3回の繁殖も可能になるとみられる。

謝辞

本稿をまとめるにあたり、釧路市立博物館の貞國利夫学芸員には多くのご指導とご助言を、日本野鳥の会鶴居・伊藤タンチョウサンクチュアリの原田修氏、知床海鳥研究会の福田佳弘氏には文献収集のご協力をいただいた。また環境省釧路湿原自然保護官事務所、釧路自然環境事務所の皆様には観察にご協力いただいた。ここに記して深く謝意を申し上げる。

引用文献

- 佐原雄二. 2005. 生態図鑑カイツブリ. Bird Research News, Vol.2No.6:4-5
- 中村登流・中村雅彦. 1995. 原色日本野鳥生態図鑑—水鳥編—. P27. 保育社.
- 福田道夫. 1986. カイツブリの秋冬期繁殖. 日鳥学誌, 35:81-82
- 渡辺央. 1993. カイツブリの繁殖生態. 長岡市立科学博物館研究報告, 28:73-90